

各関係機関長 殿
病害虫防除員 殿

徳島県立農林水産総合技術支援センター
病害虫防除所長
(公印省略)

平成19年度農作物病害虫発生予察情報について

平成19年度農作物病害虫発生予報第8号を発表したので送付します。

平成19年度農作物病害虫発生予報第8号

平成19年9月28日
徳島県

I. 普通作物

普通期イネ

トビイロウンカ

1) 予報内容

発生程度は「少～中」、発生量は平年並～やや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半の巡回調査では、定点圃場での発生は認めなかったが、西部地域で坪枯れ発生圃場を散見した。

(2) 8月4半旬～9月5半旬にかけ、予察灯への誘殺を認めた。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 特に西部地域において、10月中旬以降に収穫を迎える作型については、液剤等により防除を行う。

II. 果樹

カンキツ

ミカンハダニ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 県予察圃場(無防除区、9月20日調査)における発生量は、寄生葉率が1.0%、1葉当たり生息数が0.01頭で、ほぼ平年(5.6%、0.06頭)並の発生であった。

(2) 9月後半の温州ミカンの巡回調査では、発生圃場率は20.0%、寄生葉率は2.8%で、平年(64.2%、15.8%)と比べて発生が少なかった。

(3) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。防除の際には、十分な量の薬液を散布する。

(2) ミカンハダニは薬剤抵抗性が発達しやすいので、同一系統薬剤の連用は避ける。

カキ

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は60.0%、発病葉率は11.0%で、ほぼ平年(59.3%、10.2%)並の発生であった。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、発生に中立的である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 発生の多い園では薬剤散布を行ない、早期落葉を防止する。

炭そ病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は20.0%、発病果率は0.2%で、ほぼ平年(7.6%、0.2%)並の発生であった。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

果樹共通

カメムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少～中」、発生量は平年並～やや多い(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 予察灯への誘殺虫数は、ツヤアオカメムシ、チャバネアオカメムシともに平年並～やや少なめで推移している。

[予察灯へのツヤアオカメムシの誘殺虫数]

月半旬	勝 浦 田丁					上 板 田丁				
	2007年	2006年	2005年	2004年	平 年	2007年	2006年	2005年	2004年	平 年
9.1	5	46	69	24	47	4	6	1	2	4
9.2	9	54	124	9	50	6	8	欠測	2	6
9.3	15	11	77	12	33	7	16	欠測	0	6
9.4	52	44	欠測	20	60	11	18	2	2	14
9.5	26	12	53	13	107	4	17	2	0	14
9.6		18	174	11	81		26	12	0	19

[予察灯へのチャバネアオカメムシの誘殺虫数]

月半旬	勝 浦 田丁					上 板 田丁				
	2007年	2006年	2005年	2004年	平 年	2007年	2006年	2005年	2004年	平 年
9.1	21	298	186	75	122	3	16	10	6	10
9.2	16	323	548	36	155	1	23	欠測	5	11
9.3	26	73	206	44	92	7	6	欠測	6	6
9.4	39	345	欠測	24	114	10	18	3	3	8
9.5	10	45	79	4	57	0	7	1	0	6
9.6		48	45	20	64		7	0	1	4

(2) カメムシ類の主な餌となるスギ、ヒノキの毬果着果量は平年より少ない。

(3) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 果樹園周辺の雑木林から成虫が飛来するので、園内を巡回し飛来に注意するとともに、飛来を認めたら早急に防除を行なう。夜行性の虫なので、薬剤の散布は夕方か早朝に実施する。
- (2) 移動性が大きいので、広域一斉防除により防除効果の向上に努める。

Ⅲ. 野菜

夏秋ナス

うどんこ病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は66.7%、発病葉率は13.7%で、ほぼ平年(70.4%、17.1%)並の発生であった。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 窒素質肥料の過用を避ける。
- (2) 病斑が進展し葉の表面が菌叢で覆われると、薬液が弾かれ防除効果が劣ってくるので、薬剤散布は展着剤を加用し、早めに行なう。
- (3) 落葉した罹病葉は適切に処分する。

アザミウマ類

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は88.9%、寄生葉率は4.0%、被害果率は4.3%で、平年(37.0%、2.8%、4.0%)と比べてやや多めの発生であった。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。葉表より葉裏への寄生が多いので、散布むらのないように丁寧に散布する。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は11.1%、寄生新梢率は0.1%で、ほぼ平年(7.8%、0.3%)並の発生であった。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。アブラムシ類は葉裏や芯芽に寄生しているので、防除の際には、葉裏に充分量の薬液がかかるよう丁寧に散布する。
- (2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

ハダニ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は55.6%、寄生葉率は11.1%で、平年(30.4%、4.0%)よりやや多め発生であった。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。ハダニ類は大半が葉裏に寄生しているため、防除の際には、葉裏に十分な量の薬液がかかるよう丁寧に散布する。

(2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

アブラナ科野菜共通

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半におけるブロッコリー・カリフラワーの巡回調査では、発生圃場率は14.3%、寄生株率は1.1%で、ほぼ平年(18.9%、1.9%)並の発生であった。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

コナガ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年よりやや少ない)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半におけるブロッコリー・カリフラワーの巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が14.8%、10株当たり寄生幼虫数が0.1)。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

(2) 同一系統薬剤の連用は薬剤抵抗性獲得の恐れがあるので避ける。

モンシロチョウ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半におけるブロッコリー・カリフラワーの巡回調査では、発生圃場率は14.3%、10株当たり寄生幼虫数は0.5頭で、ほぼ平年(11.9%、0.2頭)並の発生であった。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

(1) 若齢幼虫時の防除に努める。

秋冬ネギ

さび病

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

(1) 9月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が1.1%、発病株率が0.02%)。

(2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除効果が見られなくなるので、発病前から定期的に薬剤を散布して予防する。
- (2)肥切れすると発生が多くなるので、適切な肥培管理に努める。

アブラムシ類

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年並(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期も未発生)。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生抑制的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年よりやや多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率が33.3%、50株当たり寄生虫数が2.3頭で、ほぼ平年(47.9%、3.6頭)並の発生であった。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので、発生初期に徹底防除する。
- (2)ヨトウコンーSによる交信攪乱効果は設置後3ヶ月程度で低下してくるので、早めに交換する。

ネギアザミウマ

1) 予報内容

発生程度は「少」、発生量は平年よりやや少ない(前年並)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生を認めなかった(平年同時期は発生圃場率が21.5%、葉の被害度が0.6)。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。

ネギハモグリバエ

1) 予報内容

発生程度は「甚」、発生量は平年より多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半の巡回調査では、発生圃場率は100%、葉の被害度は60.6で、平年(80.4%、14.6)より発生が多かった。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1)多発すると防除が困難になるので初期防除に努める。
- (2)被害葉は発生源となるので、圃場周辺に絶対に野積み・放置せず、速やかに処分する。

野菜共通

ハスモンヨトウ

1) 予報内容

発生程度は「中」、発生量は平年よりやや多い(前年よりやや多い)

2) 予報の根拠

- (1) 9月後半における夏秋ナスの巡回調査では、発生圃場率は55.6%、葉の被害度は26.7で、平年(24.9%、0.9)より発生が多かった。
- (2) 9月のフェロモントラップへの誘殺虫数(調査7圃場の平均)は平年よりやや少なめで推移していたが、2半旬以降増殖が顕著となった。
- (3) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫時に防除を行なう。

シロイチモジヨトウ

1) 予報内容

発生程度は「少～中」、発生量は平年よりやや多い(前年より多い)

2) 予報の根拠

- (1) 9月のフェロモントラップへの誘殺虫数(調査6圃場の平均)は平年より遅れて増加傾向にある。
- (2) 9月21日発表の1ヶ月予報では、気温は平年並または高い確率ともに40%とされており、やや発生助長的気象条件である。

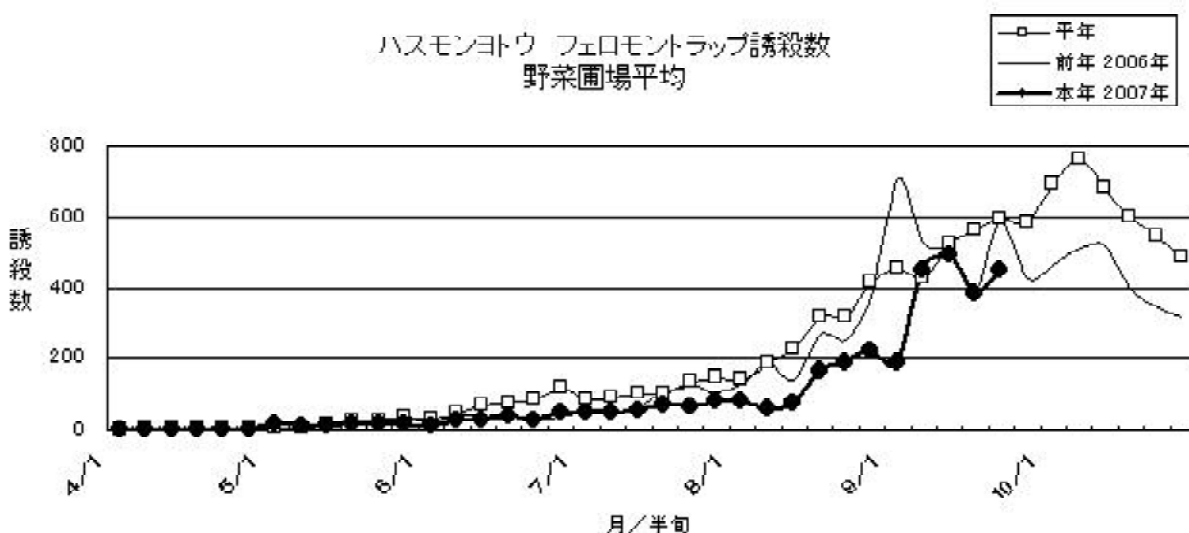
3) 防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫の齢期が進むと薬剤の効果が著しく低下するので、早期発見に努め、若齢幼虫時に防除を行なう。

[フェロモントラップへの誘殺虫数]

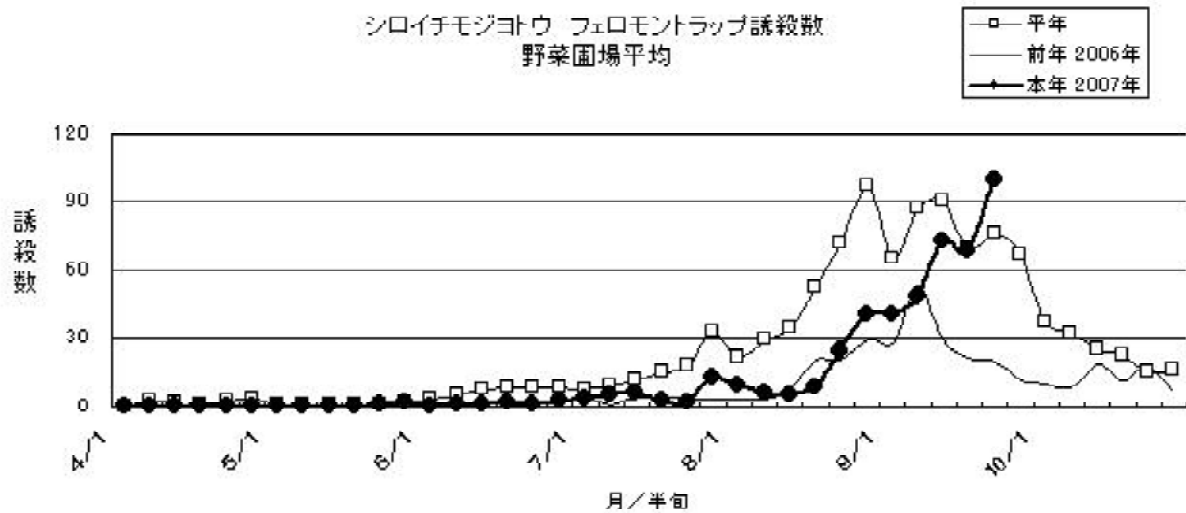
(調査圃場の平均値)

月半旬	ハスモンヨトウ					シロイチモジヨトウ				
	2007年	2006年	2005年	2004年	平年	2007年	2006年	2005年	2004年	平年
9.1	187	708	412	351	450	40	27	56	75	65
9.2	445	527	394	507	426	48	53	50	27	87
9.3	492	502	352	378	520	72	29	49	25	90
9.4	379	398	138	598	560	68	21	46	17	69
9.5	447	586	570	751	594	100	19	94	15	76
9.6		424	497	889	581		12	42	16	66



調査圃場：徳島市(川内，不動)，阿波市(柿島，香美)，吉野川市(鴨島町)石井町，東みよし町加茂

シロイチモジヨトウ フェロモントラップ誘殺数
野菜圃場平均



調査圃場：徳島市(川内，不動)，阿波市(柿島，香美)，吉野川市(鴨島町)石井町

IV. その他

1. 県予察圃場において、ハスモンヨトウの発生が多くなっています。野菜類の定植後には圃場を見回り、発生が確認されたら速やかに防除してください。
2. 薬剤の使用に当たっては、必ず農薬ラベルに記載事項を遵守してください。

発生量の表示

発生程度：甚>多>中>少>無

発生量：多い>やや多い>並>やや少ない>少ない

テレホンサービス 0883 (26) 1199

ホームページ <http://www.green.pref.tokushima.jp/boujyosyo/>

病害虫の発生予報，発生状況，防除法等をお知らせしています。